

んです！』

小鹿野はまた黙つて了つた。あたりがぐるぐる廻るやうな気がした。つかんでみると自分で信じてゐるものでも、いつまでもしつかりとそれを根強く持つてゐることは出来ないやうな気がした。否、根強く持つてゐるといふことは一つの沈滞であるやうな気がした。人生？ 誰がそれを本當に知ることが出来るだらう。戀愛？ それを誰が本當に知ることが出来るであらう。知つたと思ふことはそれはあるだらう。しかしそれはさう思つただけで、決して本當につかみ得たといふことではない……。あらゆるものはすべて流れ去る。何んなに心をそ、いだものでも皆な消えてなくなる。

『そんなこといくら考へたつてわかりやしませんよ。それよりもその時その時の心で動いて行くより他にしかたがありませんよ』

傍から春子は言つた。

『……………』

小鹿野は何か言はうとしたが、しかも言はずにだまつた。かれはお弓をすつと自分の方へと引ッ張つて來たことを、それをたうとう自分のものにして了つたことを、そこからかれは引かへして來たことを、そのために春子が自分の一つの對照になつて來たことを——今ではそれがひとつの迷路になつて來て了つてゐることを、ついこの間まで、この一年前あたりまで、しつかりとつかんでゐたものがばらば

らになつて了つたことをくり返した。そしてさういふ風になつたのは、春子のためばかりではなく、娘の幸子の事件も深く大きくそれに影響してゐることを思はないわけには行かなかつた。あらゆるものが——單に偶然に起つたり別々に存在したり、直接には何の關係もなかつたりしたものが、理由なしにいろいろな空氣を細かに醸して來るさまをじつとかれは見詰めずにはゐられなかつた。幸子が雪子の家にゐるといふことは、かれは昨日妻の口から聞いてゐたのであつた。

かれはあらゆる人だちが、ひろい茫とした空虚の中に、芋でも洗ふやうに混雜として動いてゐるのを見たやうな気がした。そしてその混雜した人だちの中にかれもお弓も春子も幸子もお糸も皆なさびしい心持を抱いて歩いてゐるやうな気がした。

一一一

いろ／＼な心の存在といふことがその夜ほどはつきりと小鹿野の眼に映つたことがなかつた。かれはとても何うにもならないことを強く感じた。

かれは春子のアパートを出て來る時、向うに小川の來てゐるのをそれと感じた。流れて行くものは何うしても流れて行くより他爲方がないといふやうな気がした。小川の細君のことなどを考へた。またあの皮肉な小川もたうとうその春子の手の中に丸められたことなどを考へた。かう思ふと、木川田が今

になつても未練を残して、何んなにわづかな場所でもよいからと言つて——、いろいろな男の唇の當らないところを捜すやうにして、あはれな状態でそこにやつて來てゐるさまが、ひとつの映畫となつて映つた。かれはあさましきを感じた。ことに、その身もそのひとりであるといふことを考へた時、一層さういふ感じがはつきりとなつた。

そのくせ、そのあさましい光景はいつまでもつゞいて行つてゐるのではなかつた。すぐ時がそれを消した。不思議にまた巧みにそれを消した。現に、已に春子の心の中にもさういふものが微妙に働いてゐるのはたしかだつた。否、それは春子ばかりではない、小川にも木川田にも、またお弓にも幸子にも、雪子にも、寛にも、お糸にも皆満遍なく公平に働いてゐるのだつた。そしてそれが靜かに——時には速に動いて行つた。雪子のこんがらかつた戀の活闘だつて、幸子の戀愛のいきさつだつて、政子と木村との同棲生活だつて、皆何等かの解決を経て行くのだつた。それはその身だつてさうだ。やつぱりさうなつて行つて了ふのだ。さう思ふと何も問題にする必要はないやうな氣がした。

心の珊瑚——あら海の中から骨折つてさがして來たやうなその心も、いざとなると、何處に何うなつて了ふのかわからないやうな氣がした。かれはお弓と長いことその心の珊瑚をさがして來たことをくり返した。たうとうそれをさがしてあてたことをくり返した。少くともかれの戀愛生活の中ではそれが一番長く且つ眞面目につづけられたことをくり返した。それがいつの間にかかういふ傍道にそれて來て——

その傍道が本道のやうになつて、そしてまたその本道が狭く狭くなつて行つたことをくり返した。さうかと言つて、かれは春子に強い未練を残してゐるわけではない。またそれをやめやうともしてゐない。相手が小川であるだけに一層さういふ風にそつちへと引寄せられる形もあることをくり返した。——かれは郊外へ行く電車の此方の隅の方に身を寄せて後にはぼんやりとあたりを眺めた。

かれはその身が空間にふわりと浮んでゐるやうな氣がした。
『まア、小鹿野さん!』

急にかれは頭を上げた。かれはそこに髷には結つてゐるけれど、誰が見ても狭斜にゐたものであるのがすぐわかる四十近い女の立つてゐるのを眼にした。それは今から十年も前に戀愛といふほどではないが、いくらか小さな渦を一年間ほどそこらに巻き散らした小冬といふ女だつた。かの女は今ではある商人の妻になつて幸福に暮してゐた。

『ヤ……』

小鹿野の傍が空いてゐたので、女はすぐそこに腰をかけた。ずつと此方に來るまで二人はその時分のことを話しつゞけた。

『廢驛』その他を讀んで

加能作次郎

田山さんの作品は、これまで大抵讀んでゐたつもりだったがけれど、この巻に收められた三つの長篇は不思議にも三つともまだ讀んでゐなかつた。而も今度その解説を書くやうに命ぜられたのは、まことに皮肉な廻り合せといはねばならぬ。私は何かしら地下の先生に、是非これも讀めといつて、これまでの不勉強を咎められたかのやうな氣さへするのだつた。が兎に角さういふ次第で、偶々今迄讀み忘つてゐたこれらの諸篇を、改めて味讀する機會を與へられたのは、私にとつて此上もない幸だつた。私は恰も故先生の新作に接したやうな心持で、何れも感銘深く一氣に讀み通したことだつた。

私はこれらの諸篇に關しては、卷頭の『廢驛』が大正十一年福岡日々新聞に、次の『曠野の戀』が同十一年大正日々新聞に、それから最後の『こゝろの珊瑚』が昭和三年讀賣新聞に、それ〴〵連載されたものだといふ以外何事も知らない。各篇の創作の動機とか、當時の作者の、内外両面の生活上の諸事情とか、又は作者と題材との關係、即ちモデルの有無やそれとの關係とか、さういふ實際上の事柄は一切

解

説

知らない。だから此の一文は、解説として必要な条件も具へず、単なる讀後の印象乃至簡單な思出話に過ぎないものだといふことを、豫め斷つて置かねばならぬ。そしてそれが一般讀者の參考になるよりも、却つてその自由な鑑賞を妨げることになりはしないかを、密かにおそれるのである。

○

私がまだ博文館で「文章世界」の編輯をしてゐた時分のことだつた。田山さんは客員として、毎號卷頭文を書いて居られ、そんな關係や何かで、毎月必ず一度は編輯室へ顔を出された。さういふ頃の或日のこと——たしかな年月は覚えてゐないが、何でも大正八九年頃だつたと思ふ——いつもの通りつかつかと私の側へ寄つて來ると、いきなり、

『君、到頭葡萄へ行つて來たよ。』

と例の元氣なこやかな、否それ以上、何かしら新しい感激に燃えてゐるやうな調子で言はれるのだつた。

『さうですか、そりやようございましたね。ぢや、早速それを一つお書き下さい』

『うむ、書く。紀行も書くが、それよりも僕は、あそこを舞臺にして小説を書く積りなんだ。』

『え、どうぞ、それも是非「文章世界」に願ひします。』

私は何か面白いエピソードでもあつたのかと、軽く簡單に考へたのであつた。さういふ紀行小説は、

田山さん獨得のものだつたし、又その種の短篇にすぐれたものが多いのだつた。と、それを抑へるやうに、

『いや、併し長篇なんだ。ちやんとした、大きなものなんだ。ずつと前から考へてゐるんで、それで又態々行つて來たんだよ。——きつといゝものが出來ると思ふんだ。』

と如何にもほく／＼と、強い意氣込み方で言はれるのだつた。

葡萄といふのは、羽越境の峠の名なのである。溫海溫泉から越後の村上に至る間の——鼠ヶ關、勝木寒川、桑川など海府浦一帶の、所謂羽越線の絶勝地の奥の方を通つてゐる、高い峻嶒な國道の峠なのである。田山さんは前に一度其處を踏破したことがあり、そのすぐれた景觀や、特異なローカル・カラアに富んだ、附近宿驛の生活の有様などに、餘程印象の深いものがあつたと見え、是非もう一度行つて來たいと、始終言ひ／＼して居られたが、その時それを果されたのであつた。勿論汽車の全通前のことでそれが間もなく『葡萄峠を踰ゆる記』となつて「文章世界」にあらはれたが、その時の喜び方や意氣込方には、何か異常なものがあつた。單に憧れの會遊の地に遊んで來たといふ満足の喜び、そんなものとも全然異つてゐた。まるで年來の戀でも成就した時のやうな、一種情熱的な興奮と感激にわく／＼してゐる、といつたやうなところがあつた。

私は『廢驛』を讀みながら、その時のことをあり／＼と眼の前に思ひ浮べた。そしてその時の田山さ

んの氣持が、はつきりと手に取る如く分るのであつた。

『成程さうだつたんだ！ これを書きに態々遠く行つて來られたんだ。そしてもうあの時には、ちゃんと此の作が出來てゐるんだ。始めの書き出しから、終りの一句まで、すっかり頭の中に書き上つてゐるんだ！』

かう私は思ひ返して見ずに居られなかつた。そして此の作の冒頭に出て來る田舎の收税吏の加藤さんは、始めて葡萄峠に旅した時の田山さんで、終りの「その三」に、それから二十年経つて、中央政府の高級官吏に出世して再び登場して來る加藤さんは、あの時——二度目に其處を訪れた田山さんだといふことを思ふにつけ、此作の創作の動因や機縁なども分るやうな氣がして、一層感慨深く且つ興味深く讀まれるのだつた。

○

冬は烈しい吹雪にとざされて、幾日も交通の杜絶する北國僻遠の葡萄峠の山の中、曾てはそれでも相當に榮えてゐたのが、汽車が通じて、而もその汽車を他の村へ持つて行かれたが爲に、急に住む人も稀れに荒廢して行つた名もない山中の一小宿驛、そんな遠い邊鄙な山里まで、田山さんは私達を連れて行つて、そこに吾々の現實の人生を、まざ／＼とありの儘に展けて見せようとしたのが、この『廢驛』の一篇だといふことは、讀者の誰でもすぐ氣がつくことだらう。こゝに描かれてゐる悲痛悽慘を極めた悲

劇は、決して羽越國境の寂しい山の中といふ特殊な土地に起つた特殊な事件ではない。田舎にも都會にも、廣い人生の到る處に、毎日のやうに起つてゐることなのである。少くとも作者はさういふ氣持で、あれを一個の人生の縮圖として、否その象徴として、あの主人公長兵衛の悲痛な愛慾と没落の生活や、土地の荒廢のありさまを描いてゐるのである。

『何處にも此處にも男と女の仲ばかりであつた。誰も彼も皆その爲に苦しんでゐた。』

かう作者は此作の或る所で、深い感慨を洩らしてゐるが、これが、田山さんの殆どすべての作品の基調をなし主題となつてゐるものだといつてよい。男女の愛慾とその葛藤、それは實に『根強い、根本的な、人間の力では何うすることも出來ない兩性の悲劇』であり、運命であり、それが人生そのもの、姿だといふのである。そして田山さんの多くの作品は、すべてこの独自の人間觀乃至人生觀の具體化、實例化だといつてもいゝ位である。

それからもう一つ、人生のすべての事は、戀も、慾も、富も、榮譽も、歡樂も、悲哀も、努力も、争闘も、善も、惡も、生も、死も悉く、結局は「時」といふ強い大きな自然の流れの中に捲き込まれて、跡方もなく空しく消え行き滅び去つて了ふといふ、一種咏嘆的な虛無觀である。これも田山さんの多くの作品の根底に流れてゐる思想で、他の長篇の傑作『時は過ぎ行く』や『再び草の野に』などによつても讀者は容易くそれを感じられるであらうが、この『廢驛』には、特に色濃く、露骨にそれが強調され

てるる。

『人間の努力なんて、何でもないもんですね。小さな立派に築き上げたものでも、三年放つて置けば、全く元の自然に、——草薙になつて了ふもんですね。……』

『それからまた長い年月が経つた。その間には、種々な事件が起り、多くの人達が死に、變遷が變遷に續き、推移が推移に續いた。日に日に新しく墓が築かれて行つた。かうして人間の世は經つて行つて了ふのだな？ 善いも悪いも、悲しいことも喜ばしいことも、一度すぎ去つて了つては、あとには何も残さなくなつて了ふのだな？』かうした慨嘆が一方に繰返されると同時に、一方では、「何アに、何だつて構ふものか、どうせ、死んだことには何も無いのだ！ 何も残らないのだ！』かういふヤケに近い言葉も取交された。しかし時の移つて行くさまは、さうしたものよりは大きく且つ力强よかつた。皆な經過して行つて了つた。その中には、いろ／＼な心があつたらう。戀の未練もあつたらう、親子の愛情の絆もあつたらう。……(中略)……それは實に、千變萬化であつたに相違なかつた。しかし、さうしたのも、何も彼もすぎ去つた。山の外に流れ去る溪流と共にとこしへに過ぎ去つた。』

そして田山さんは、二十年後に再び葡萄峠の山中の廢驛を訪れた農商務省官吏の加藤さんになつて、具さにその荒廢の跡を葬つてゐるのであるが、その爲に、この『廢驛』の終りの約三分の一が費されてゐるのにも見ても、此の作の根本のテーマが何處にあるかを窺ふことが出来るだらう。私はこの作中に、

始め主人公の太田屋の長兵衛になつて、烈しい愛慾の葛藤に血みどろに喘ぎ苦しんでゐる田山さんと、後に官吏の加藤さんになつて、その傷ましい己が犠牲の姿と、慘憺たる人生荒廢の有様とを、靜かにちつと凝視めながら、無限の哀愁の涙を注いでゐる田山さんと、この二人の田山さんを見出して、今更の如く追慕の念を新たにした。

『君、世の中といふものは不思議なもんだね。何も彼も時といふもの、中に没して行つて了ふんだね、艱難も悲劇も——とてもこの儘では生きてはゐられないやうに思つたほどの悲劇も、經つて行つて了つて見れば、何でも無いものなんだね、夢見たいなものだね。ねえ、君、さうぢやないか。人生といふものは、そんなもんだね！』

時々私などをつかまへて、ほろ苦がさうに酒盃をふくみながら、そんな風なことを言はれたものだったが、今にもその聲が耳に聞えて來さうである。

『廢驛』のみに紙敷を費して了つて、後の二篇に關しては、殆ど何事も言ひ及ぶ餘裕がなくなつて了つたことをお詫びしなければならぬ。併し『曠野の戀』でも『ころの珊瑚』でも、私は矢張りその中にさういつた同じ様な聲を聞くの思ひがするのだつた。中で『ころの珊瑚』には、父親の戀と娘の戀、大人の愛慾の惱みと若い者の愛慾の苦しみ、その對照の描寫の中に、より複雑な、より興味多き人生を

思はせるものがあつた。たゞそれだけのことを言ふに止めて、後は讀者の自由な鑑賞に任せよう。

(昭和十一年十二月)

昭和十一年十一月十一日印刷
昭和十一年十一月十五日發行

花袋全集第十一卷
豫約價金壹圓八拾錢



製複許不

著作者 田山 彌

發行者 東京市小石川區竹早町三十二番地
川 俣 馨 一

印刷者 東京市本所區麻橋二丁目二十七番地ノ二
井 上 源 之 丞

東京市小石川區竹早町三十二番地
(内外書籍株式會社内)

發行所 花袋全集刊行會

電話小石川(85)一〇五四番
振替東京二八七九〇番

(刷印場工分所本社會式株刷印版凸)





